



「桜蓮祭を終えて」

実行委員長 2年生

第12回桜蓮祭を終え、昨年同様、今年度も多くの方にご来場いただき、実行委員長として、桜蓮祭実行委員を代表してお礼を申し上げたいと思います。今年度は、「Link to the community～繋がる地域の輪～」をスローガンに掲げ、これまで以上に地域との繋がりを意識して取り組みました。結果、日頃様々な方々に協力いただきながら、大学生活を送ることができていることを再認識できたと思っています。

今年は、昨年に比べ企画数も増えたこと、校内にコンビニがオープンして初めての桜蓮祭であること、初の取り組みである「ミス看護大」が行われたことなど、私達としては、多くの不安と期待が詰まったものとなりました。それに際して、これまで以上に多くの方々に協力いただきました。特にミス看護大は、多くの方に広報関係でご協力いただき、当日は会場が満員になるほどご来場いただくことができました。

サークルの取り組みとして、災害看護サークルやハカレンジャーによる発表や健康測定にも、多くの方々、また様々な年齢層の方々に来ていただくことができました。食品などのサービスのようない「一大学」としての取り組みではなく、これらの企画によって、「新潟県立看護大学」としての取り組みを行うことができたと思います。これらの企画

が、これからの皆さんの生活の一部として活かされると同時に、私たち新潟県立看護大学との繋がりと手段の一つになってくれればと願っています。

今年は天気にも恵まれ、昨年より多くの来場者を迎えることができました。多くの方々と、この桜蓮祭を通してほんの少しでも関係性を築くことの後押しとなったなら、実行委員長として、何よりも頑張った甲斐があったと思います。少子高齢化や時代の変化によって、これまで以上に地域医療の重要性が叫ばれたのは、何も最近のことではありません。私たちもそれを、日々の学習の中で様々な根拠から学びました。しかし、地域と関係を持つ機会是非常に少ないものです。そこにおいて、この桜蓮祭は絶好の機会であると思っています。何も、この機会に深く知り合う必要はありません。これをきっかけとして、それぞれがそれぞれの場で活かすことができたなら、この企画の価値は大いにあったのではないのでしょうか。今年度は本当に多くの方々に協力、ご来場いただきました。素晴らしい思い出を作ることができるよう、今後も尽力していきたいと思っています。これからも新潟県立看護大学をよろしくお願いいたします。

もくじ

1 桜蓮祭を終えて

2 継燈式
高田祇園民謡流し
オープンキャンパス

3 新教員紹介
実習について

4 実習を終えて

基礎看護学実習を終えて

5 上越地域看護研究発表会(9月28日)

地域課題研究発表会(9月28日)

メディカルグリーンツーリズム

6 公開講座(11月30日)

いきいきサロン

7 卒業研究を終えて

サークル紹介

8 知事とのタウンミーティング開催

研究報告

編集後記

継燈式

7月10日に2年生が先輩から看護の灯を受け継ぐ継燈式を行いました。実習施設の指導者や先輩方からの看護に対する思いをしっかりと引継ぎ、看護者として更に邁進することを誓いました。



高田祇園 民謡流し



7月25日の「高田祇園祭」の民謡流しに、学生51名、教員15名の計66名が参加しました。事前に練習した成果を力一杯発揮して踊っている姿が印象的でした。また、元気で明るい看護大の学生達の様子を見て、地域の皆様から、温かいご声援を頂きました。

オープン キャンパス



8月6日、23日にオープンキャンパスが行われ、県内はもちろん県外からも併せて347名の方々が参加されました。学長室訪問では、「改めて看護師になりたいと思いました。学長のお話を聞くことができ本当に良かったです。」との声が聞かれました。また、在校生との懇談では、「在学生の話している顔や雰囲気から学校生活が充実しているようにみえた。」等、嬉しいコメントを頂きました。参加された皆さんは、様々な講義や演習の体験をしたことで、看護への興味が更に高まっているように見えました。



新教員紹介

助教 石原 千晶

9月から成人看護学領域に助教として入りました。出身は群馬県高崎市です。8月までは地元の看護系大学に勤務していました。これまでの人生の中で何回かターニングポイントがありましたが、今回も重要なターニングポイントだと思っています。私は5年の臨床経験の後、教員になりました。指導者をしている時に学生と関わることの楽しさ、おもしろさを感じて教員になりたいと思ったからです。その後、教員として専門学校に勤務しましたが、数年しているうちに、もう一度看護師に戻りたい、臨床で働きたい、と強く思うようになりました。病院勤務に戻ることを決意しましたが、すでに臨床から離れて7年位経っていたので再度、3交代勤務をすることに抵抗がなかったわけではありません。大丈夫だろうかと内心心配していました。その心配を払拭したのが学生の言葉でした。社会人経験を経て看護学校に入ってきた30代後半の学生で、卒業後は総合病院への就職が決まっていた。3交代勤務の不安はないのかと聞いたところ、「3交代をやってこそ看護師ですよ」ときっぱり言いました。清々しいきっぱりとした言葉

が私の不安も無くしてくれ、頑張ろう!今、看護師に戻らなければ後悔すると思いました。そして、看護師に戻って産婦人科病棟に勤務しました。外科系での経験が多かったので、産婦人科は“畑違いだ!”と思いましたが、段々とその魅力にはまりました。その時の婦人科がん患者さんとの関わりが私の研究テーマになっています。人生って無駄なことは一つもないんだな~としみじみ思っています。

さて、上越市での暮らしぶりですが、まず驚いたのが湿度の高さです。乾燥している群馬とは違い、肌にまとわりつくイヤな暑さに我慢できない感じでした。そのうち慣れるだろうと思っていましたが、全然慣れず、結局除湿器を購入することで落ち着きました。これから本格的な冬になり雪かきに悪戦苦闘することは目に見えていますが、対策をバッチリして乗り切ろうと思っています。よろしく願いいたします。



ふれあい実習 —上越市の中山間地を訪問して—

コーディネータ代表 関谷 伸一

1年生の後期実習「ふれあい実習」の現地実習は、男女合わせて93名が24班に分かれ、10月7～9日の3日間、上越市の牧区、安塚区、浦川原区、大島区の4区で行われました。これらの中山間地に2泊3日滞在し、地域の方々のお話を耳を傾け、農作業を手伝い、食事を共にし、レクリエーションを楽しみました。

学生たちは、何を質問し何を話したらよいか、お楽しみ会の出し物をどうするかなど、初めての体験に緊張し、悪戦苦闘していましたが、これらの地域での生活の温もり、感触、匂いなどを、五感を

総動員して感じ取ってきました。生活の楽しさと厳しさ、地域が抱える課題とそこでの喜び、そして何よりも元気にたくましく生活する地域のみなさんを知ることができました。その後、これらの体験や調査の結果、感じたことなどを地域の皆さんの前で発表し、中山間地の暮らしについて討論しました。学生の報告書には、生活や環境の違いを知った驚きや発見が素直に書かれていると同時に、地域で暮らす人々を看護という視点からとらえようと試みている文章が随所に見られ、実習の成果を感じました。



実習について



ふれあい実習を終えて

1年生

私たち1年生は10月7日から9日までの3日間、ふれあい実習を行いました。この実習は、「上越市で暮らす人々の生活の場に入って人々と交流しながら、地域文化や価値観を知り、そこでの看護が果たす役割について理解すること」を目標としています。私たちの班は安塚区を訪れ、高齢者の視点に立って生活や価値観、安塚区が抱える問題点について考えました。



農作業風景



収穫した野菜

安塚区の方々のお宅を訪問したとき、どの家庭にも物を大切にしている習慣があることに気がきました。それは、自分で作った食材を無駄がないように工夫して調理している様子や、昔からある家具を大切にしている様子などからうかがえました。高齢者の方々は、若い世代が忘れかけている価値観を今でも大切にしていました。また、安塚区では近所同士の茶飲みや交流会が盛んに行われ、高齢者の方々がいきいきとしている様子が印象的でした。このような地域のつながりの強さが困った時の助け合いに役立っているのだと思いました。

少子高齢化が進むとともに、安塚区では医療の面で様々な問題が出てきていることが分かりました。大きな病院に行くための交通手段が確保できず、緊急時の対応が困難だということです。そこで考えたのは訪問看護の充実です。高齢者の方々は住み慣れた場所で健康に暮らすことを望んでいます。そのためには、私たちが高齢者のお宅を訪ねて健康管理をしていく必要があると思いました。また、一人暮らしの方々が安心して暮らせるように、心の健康を守っていくことも大切だと考えました。このことは、高齢者の方々が大切にしている価値観や文化を守ることにつながると思います。

今回の実習で、高齢者の方々の生活の様子や考え方を知り、人にはそれぞれ違った考え方や生活様式があり、そのひとつひとつを尊重することが大切であると感じました。将来看護職に就いたときに、患者さんの生活背景にまで気を配り、「その人らしい」生き方を尊重した看護を行えるように日々学び、訓練していきたいと思っています。



基礎看護学実習を終えて

2年生

私たちにとって今回の基礎看護学実習は、病棟実習では2回目でした。初めての实習でなくても専門的な知識はまだまだ少なく経験もないため、不安や緊張でいっぱいでした。

私は、今回の実習で受け持たせていただいた患者さんとの関わりの中で、看護の役割とは医療行為を行う医療従事者として、患者さんが生活するために必要な援助を行う介助者として、そして患者さんの一番近くで心に寄り添う人として、患者さんとしっかり向き合い、その人らしい健康に携わっていくことだと学びました。

私が受け持った患者さんは最初、私のことを学生と割り切り心を聞いてくれていなかったため、患者さんと私の間には壁があるように感じていました。うまく会話ができなかつたり、考えた援助を受け入れてもらえなかつたりと落ち込むこともありましたが、それでも積極的に身の回りの整備や、援助を行いました。自身の行為にも慣れていき、患者さんとの間の雰囲気少しずつ和やかになるにつれて自分にも自信が出てきて、最終日の最後の会話では私の目を見て笑顔で話してくれ、初めて名前で呼んでくれました。その時に心から患者さんに

自ら進んで向かって行って良かったと感じ、ここから信頼・安心感のある援助関係がつけられるのだと実感しました。将来は私が経験した条件でなくても、患者さんと良好な関係が築けないことが沢山あると思います。そんな時に、拒否されてもまずはしっかりと患者さんに向き合っていくことが看護の役割に繋がるのではないかと思います。

今回の実習で感動したことは、患者さんとの援助関係を構築できたことに加え、自分が行った援助によって患者さんの症状に改善が見られたことがありました。看護師の方や患者さん・先生方から学んだことは多く、実習で得たものは大きいですが、それを3年生での実習にしっかりと活かすことができるように日常の学びを大切にしたいと思いました。



平成25年度上越地域看護研究発表会 平成24年度地域課題研究発表会

9月28日
発表会

9月28日平成25年度上越地域看護研究発表会、及び平成24年度地域課題研究発表会が開催されました。上越地域看護研究発表会は上越地域の各病院や地域に所属する看護職員の看護連携を図る目的で、各機関から13題の研究発表が行われました。(参加者83名)

また、地域課題研究発表会では、新潟県内の保健・医療・福祉に携わる看護職(看護実践家)と本学教員が共同して地域の看護実践での課題解決に向けた研究を行うもので、7題の研究発表が行われました。(参加者43名)

どちらの発表会も、地域の看護の質をより高めるために、活発な意見交換が行われました。



メディカルグリーン ツーリズム

介護準備・学習コース『看護大での「排泄ケア」演習と介護施設見学』講座

准教授 永吉 雅人

看護研究交流センター特別研究部門は、11月28日(木)、直江津学びの交流館との連携で、「排泄ケア」の講座を実施しました。福祉施設勤務の人、現在介護中の人、すでに介護を終えた人、これから介護をしていく人というように立場の異なる14名がそれぞれの想いで参加していました。

講座はまず、平澤則子教授による「排泄とねたきり度(身体の動き)の関係」「尿失禁の分類」「行動療法」の講義、次に、高林知佳子准教授による「寝たきり度」J,A,Bランクの介護ケア」演習として①大人用おむつの紹介と吸収力の実験、②最新ポータブルトイレや吸引尿取パット等の福祉用具の紹介、③移乗介助方法の体験の3部構成で行われました。参加者からは絶えず質問がなされ、大変活発な講義・演習となりました。その後、有料老人ホーム「スローライフもんぜん」、介護老人福祉施設「和久楽」を巡り、それぞれの「排泄ケア」の取組みについて説明を受けました。

本講座は「とても満足」の声が多く、特に大学での講義・演習は、「満足・やや満足」が11人中9人と大変好評でした。介護準備・学習コースの取組みは、直江津学びの交流館でも同様の取組みを始めており、大学にて企画した取組みの「実施主体を他団体に

移行]できたと考えられることから、発展的解消となります。しかしながら、今後とも行政におけるますますの福祉・介護の取組みに期待したいと思います。

さいごに、各施設間移動のためのバスを手配頂きました上越市、新幹線まちづくり推進上越広域連携会議に対しまして御礼を申し上げます。



どこでもカレッジ公開講座 「呼吸のフィジカルアセスメント」開催報告

新潟県立看護大学看護研究交流センター 看護職支援部門 飯田 智恵

看護研究交流センター看護職学習支援部門は、看護専門職向け公開講座「どこでもカレッジ公開講座」を開催しています。11月30日(土)に開催された「呼吸のフィジカルアセスメント」の講座には、34名の現職看護師さん達が参加されました。

前半は、呼吸のアセスメントに必要な基本知識の講義を、後半はシミュレーターを使用して異常呼吸音の聴診トレーニングを行いました。「呼吸音の聞き分けが思うようにできず、臨床での判断に悩んでいるが、講義や演習によって理解が深まり、明日からの実践に役立てられそうだ」など、各々手ごたえを感じて下さったようです。また、参加者の中には、本学を卒業し、現在は臨床で看護師をしている卒業生も数名おり、大変嬉しく思いました。

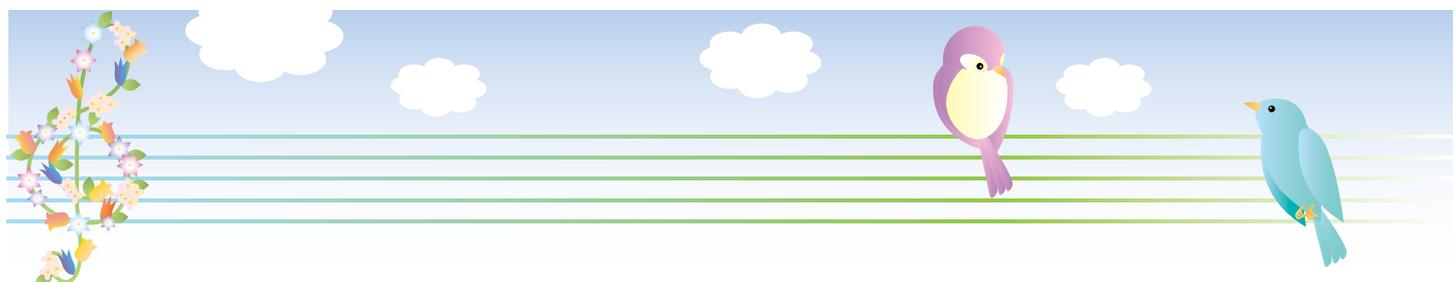
本部門では、看護職の総合的な資質向上をめざし、様々な公開講座のほか、インターネットを用いた仮想大学(バーチャルカレッジ)を開催しています。(詳細については、看護研究交流センターのホームページをご覧ください。看護研究交流センター事務局 電話025-526-2822へお問い合わせください)。楽しく



学びながらスキルアップできますので、看護職および関係職種皆様のご参加をお待ちしております。看護学生の皆さんも大歓迎です。



健康に関心のある皆様が気楽に集いながら、知識を深める市民公開講座の「いきいきサロン」ですが、今年は計6回、約500名の方にご参加頂きました。今年の内容は、ロコモティブシンドロームや生活習慣病に関するお話、実際に簡単な運動を行ってみたりとバラエティに富んだ内容でした。次年度も開催予定ですので、皆様ぜひおこし下さい。



卒業研究を終えて

卒業研究を終えて

4年生

私は、「人工膝関節置換術を受けた患者のリハビリに対する意欲を高める要因」というテーマで卒業研究に取り組みました。きっかけは3年生の時の領域別実習でこの分野に興味を持ったことです。テーマを決めるきっかけは人それぞれですが、本当に自分が知りたいこと、興味があることを研究することが良いと思います。テーマを決めるには時間がかかります。本当にこのテーマが自分が知りたいことなのか、何が明らかになるのか、ということを経験しました。途中でテーマが変更することもあり、その際には自分の考えがぶれそうになって「私は何がしたいのだろう」と悩んだこともありました。なので、自分と向き合い、考えをしっかりとって研究に取り組むことが大切だと思います。

研究は、3月から始まり約9か月かけて完成させます。長かったようであっという間だった気がします。振り返ってみて一番大変だったことは、研究計画書を書くことでした。はじめの頃は研究というものがどのようなものなのかをよく理解していなく、文章の書き方や文献検討などすべてが手探り状態でした。また、文章を書くことが得意

ではなかったため、自分の言いたいことを短い文章の中でまとめあげることも難しかったです。しかし、何度もゼミの皆や先生と一緒に意見を出し合い、検討を重ね研究を進めていきました。一人では完成できなかったと思いますし、皆さんの支えがあったからこそ無事に発表を終えることができたと思っています。感謝しています。

卒業研究を終えた今、やることは国家試験へ向けての勉強のみになりました。一日一日を大切に、落ち着いて勉強を進めていきたいと思っています。そして、笑って合格発表の日を迎えられるように頑張ります。

最後に、研究に協力していただいた患者様、看護師さん、先生、ゼミの皆さん、本当にありがとうございました。



研究発表を行う〇〇さん

災害看護サークル紹介

2年生

私たち災害看護サークルは、2012年4月に発足した新しいサークルです。2011年に発生した「東日本大震災」を受け、看護を勉強する私たちが災害時に何ができるかを考え、結成しました。活動目標は、災害時に役立つ知識や応急処置の技術を身につけることとしています。また、2013年3月には、「青年赤十字奉仕団」に加入し、団員として日本赤十字の活動にも参加しています。活動場所は、開始当初は学内だけでしたが、少しずつ学外での活動も増えてきています。活動内容を分かりやすく知っていただくために、今年度の活動について説明していきたいと思っています。今年度の活動は主に次の3つでした。

1つ目は、高齢者・障がい者になっての避難体験です。「高齢者体験グッズ」、「車いす」を用いて、学内の避難経路をメンバーで歩いてみました。私たちが避難する中では支障のない道も、高齢者や障がい者



桜蓮祭での活動の様子

からすると恐怖や不安を感じていることを実感することができました。

2つ目は、学外での熱中症対策の寸劇の発表です。諏訪地区の方に依頼をいただき、諏訪小学校の体育館で行われた敬老会において、炎天下で畑仕事中に熱中症になったお年寄りとその家族を演じ、熱中症になった際の対処方法を紹介しました。学外での初めて活動を行い、地域の方々との繋がりを持つことができ、たいへん貴重な機会となりました。

3つ目は、11月2日に行われた桜蓮祭での活動です。内容は、応急処置に関する寸劇、救命処置方法の展示でした。目標は、「私たちが学んだことを地域の方々が実際に行えるように、専門用語などを使わず分かりやすく説明すること」でした。劇は、テーマを春夏秋冬に分け、それぞれの季節に起こりやすい病気、けが、事故に対しての応急処置を丁寧に説明しました。応急処置の方法は、日本赤十字指導講師の方からご指導を受け、きちんとできるまで時間をかけて練習しました。救命処置方法の展示では、事前に学内の教員から講義を受け、人形を用いて救命処置の方法を学んでから、展示資料を作成しました。今回の桜蓮祭では来場された方々から「分かりやすくて、よかった」という、うれしいお声をかけていただきました。しかし、反省会ではいくつかの改善点も見つかりました。来年度の桜蓮祭では、改善点を生かし、さらに良いものを発表したいと思っています。

まだ発足して2年目の新しいサークルですが、今後はさらに多くの知識や技術を身につけていきたいと考えています。

サークル紹介

「知事とのタウンミーティング」開催

10月19日(土)に、泉田新潟県知事をコーディネーターとして、今年4回目のタウンミーティングが、本学にて行われました。今回のテーマは、「高齢者の見守り活動を考える～地域全体で支える仕組みとは～」と題して行われ、本学の平澤則子教授も、パネリストとして出席しました。当日は、160名にもものぼる参加者を迎え、パネリストや参加者が一体となって活発な議論が交わされました。



(新潟県ホームページより引用)

『小規模多機能型居宅介護における看護ニーズと看護師の活動』調査の報告

地域生活看護学領域 講師：片平伸子

研究報告

日本は現在、超高齢社会を迎え、様々な不具合や病気を抱えながら暮らしている高齢者が増加しています。こうした高齢者が健康で質の高い生活を住み慣れた地域の中で送っていくための新しい介護保険サービスとして、2006年に小規模多機能型居宅介護が創設されました。これは、「通い」を中心に「宿泊」「訪問」を組合せ、24時間体制で介護・支援が必要な高齢者の在宅生活を支援する地域密着型サービスの1つであり、2012年12月現在、全国で約3,200施設が登録されています。この施設には看護師の配置が義務付けられており、新たな看護師の活動の場の1つとなっています。また、利用者は介護・支援が必要な高齢者であることから、潜在的・顕在的な看護のニーズが高いことが予測されます。しかし、利用者の看護ニーズや看護師の活動の実態は明らかになっていません。これらを明らかにし、小規模多機能型居宅介護における効果的な看護のあり方を検討する必要があると考え、全国の1,000施設の管理者および看護師を対象に調査を行いました。

その結果、利用者の9割以上が75歳以上の後期高齢者であり、重度の要介護者が23.7%であることがわかりました。さらに、過去3ヶ月間に病状の変化や事故で利用者を救急搬送した施設は40.6%であり、ターミナルケアの実施経験がある施設が35.9%であることが明らかになり、小規模多機能型居宅介護における看護ニーズが示されました。また、看護師は「利用者の健康状態の把握」や「状態変化時の対応」、「受診の必要性の判断」「介護職員への看護的視点での助言」「服薬管理」等の役割を担っていることがわかりました。

現在、これらの量的調査の結果を踏まえて、個々の施設における看護師の活動内容の詳細、実施した行為と判断、小規模多機能型居宅介護施設における看護の長所・課題と工夫等について面接調査を行っており、これまでにない高齢者の在宅支援サービスの中での看護師の活動の特徴や、背景にあるものを探っていくところとです。